
設定上のまおうさま！？

毎日頑張る

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

設定上のまおうさま！？

【Nコード】

N8997Z

【作者名】

毎日頑張る

【あらすじ】

魔王が正義で、王族が悪？

めんどくさがりで怠け者の魔王の日常と非日常をご紹介します！

（初投稿なので、誤字脱字あったら教えてください）

初めのごあいさつ（前書き）

誤字脱字あったら教えてください。

初めの「あいさつ」

薄暗い、広い部屋の中にその男はいた。その部屋の奥、少し高くなっている場所に置いてある椅子にその男はだるそうに座っていた。

その時、重そうな甲冑かっちゅうに身を固めた兵士が走ってきた。

「魔王様！ 1分前に王国から、2人勇者が旅立ちました！」

「どうでもいい」

「さらに、59秒前に片方が門の前にやってきました」

「あっそ」

「そして今、魔王様に会いたがっております」

「がんば……。って速過ぎでしょ！ しかも門番は59秒何してた！？」

「世間話をしていたそうです」

「門番、のんきすぎ！」

「どういたしましょう」

「……。闇の勇者か？」

「そのようです」

「つれてこい」

男、いや魔王がそういうと兵士は出て行った。

「リリイ！」

「なんでしょ、魔王様？」

青い髪の少女が妙に間延びした口調で言った。その少女はリリイという髪がウェーブしていて、16歳程度に見える。100人に聞くと90人は美少女と答えるだろう。

「客がくる。お茶の用意をしろ」

「わかりました」

そういつて走っていくリリイ。途中転んだのは「愛嬌」。

「ラル」

【なんですか、ややこしい仕事は押し付けられないくださいね。青い

鳥を見つけると言われた時なんて大変だったんですよ！」

天井のスピーカーから声が出る。

「だれがいつそんなこと言ったんだい？ とにかくお客様用のあれを出してくれ」

【突っ込み所を逃した】ラルは心の中で思った。

「さあ、忙しくなるぞお」

魔王はうれしそうに行った。

初めの「あいさつ」(後書き)

とりあえず毎日「話ず」つ出していきます。

まおうさまのお城

「……」

彼女は、身長のかるく15倍はある門の前に体育座りをしていた。彼女は服装はあまり気にしないのだろうか、黒い薄手のシャツにジーンズというとてもラフな格好をしていた。街中ならこんな光景は珍しくない。だが、ここは標高2000メートルのところにある魔王城（ラルには「怠け者の城」と呼ばれている）だ。その状況が彼女の体の強靱さ（きょうじん）を物語っている。彼女は、細身な体つきで100人に聞いたら99人美少女だと答えるだろう。

ぎざぎざいー。油の切れた音がして門が開く。

「魔王様がお前に会ってくれるらしいぞ」

中から門番らしき人が出てくる。

「……」

彼女は、うなずきその人へついていく。「知らない人についていっちゃだめよ」母に昔言われたことを思い出す。

しばらく真っ直ぐに進むと扉があった。それは魔王が「めんどくさいのは嫌だ！」と騒いで作った廊下なのだが、彼女は知らない。

門番が手で扉をあける。すっと開く。ここは手入れているようだ。

「おつ、きたか。よう来た、よう来た」

まるで、田舎の年寄りののようなことを言う魔王。

目の前の光景を見て彼女は首をかしげる。なぜなら、そこにはちやぶ台とそこに緑茶を持ってすわっている魔王の姿があったからだ。

まおうさまのお城（後書き）

コメントもよろしく願います。

まおうさまの説得（前書き）

誤字脱字あったら教えてください。

まおうさまの説得

「おう、どうした、そんなところで固まって？　まあ座ってゆつくりしていつてくれ」

魔王が人懐っこい笑顔で言うが普通、そんなことできるわけがないと彼女は思った。

「ほら、緑茶が冷めるから早くおいで」
「……」

仕方がないので彼女は座ることにした。

「じゃ、とりあえず。おなまえは？」

小さいころに見た教養番組でも子供がそのように聞かれていたな、と彼女はおもう。

「白手^{しうで}蓮^{れん}」

「駄目だよ、こういう時は『しらで　れんです！』って言わなきゃ」

【魔王様、自分の変な趣味を人に押し付けるのはやめてください】
彼女……いや、蓮は驚いた。天井のスピーカーから声がしたからだ。スピーカーの横には赤く光るカメラまで付いている。

「俺は、第10第目魔王、……名前は忘れた、好きに呼んでくれ」
「じゃあ……魔王で」

「なんだ、安直だな。まあ、シンプルなものも悪くないが。で、さっき魔界のルールを教えるのを邪魔した奴が、俺が作ったラルだ」

【あんなの魔界のルールでも何でもありません！　魔王様の趣味です！】

蓮は呆れながら言った。

「作ったってどういうこと？」

「ああ、ラルは俺が作った人工知能、いや、魔王が作ったから魔工知能だ！」

【魔王様のくだらない話は置いて。この、な……魔王城の全シ

システムの管理をしています」

「あっさりスルーされて、しかも、怠け者の城って言おうとした！」
涙目になりながら必死に抗議する魔王。

蓮は話を無理やり進める。

「とにかく、私は闇の勇者として貴方達を……」

「倒すって言っんだろ。まあ待て、そうあわてるな」

さっきとは違い急に様子が変わった魔王。蓮は腐っても魔王だな
と思った。

「まず、俺はお前らの聞いたような魔王じゃない。人も襲わない」

「！！ でも王国でも魔物に襲われたって人がたくさん……」

「おれは魔族の王だ。魔物とは関係ない」

蓮は驚きを隠せない。王の言っていたことと全然違う。確かに魔
族に襲われたという人は1人もいなかった。

「じゃあ金銀財宝を奪うっていうのも……」

「ウソだ。というか、税として多額の金を国民から取ってる分あい
つらのほうが悪いな」

そう言っただけで緑茶をすする魔王。

「でも、証拠なんてないでしょ」

「いや、あるぞ。そろそろだな」

魔王がそう言った時、扉が開いた。

「まおうのおにーちゃん！」

そこには小さな女の子が立っていた。

「！！ その子……」

「みさきちゃんだ。前に魔物に襲われてたのを助けたらたまに来る
ようになった。どうだ、これでもだめか？」

「……」

蓮はただうつむいていた。

「よし。みさきちゃん、ごめんね。今日は遊べないんだ」

「ええ」

明らかに不満そうな顔をするみさきちゃん。

「また今度遊ぼうね」

「うん！」

みさきちゃんは出て行った。

「とりあえず、色々説明したい事があるからよく聞いてろ」

「分かった」

魔王はウソをついていない。なぜなら、嘘ダウトの魔法でウソをついていないとでたからだ。

「の前に一つ」

「？」

「俺は腐っちゃいない！」

蓮は執念深い人だなと思った。それにもう一つ思った

「人の心を勝手に読まないでください」

まおっさまの説得（後書き）

今回ちょっと長めです。

あと、1話のあれは卓袱台のことです（説明いるような文章書くなよって話ですが）。

まおっさまの現状説明（前書き）

誤字脱字あったら教えてください。

まおうさまの現状説明

「本題に入ろう。まず、なぜ王がウソを言わなければならなかったのか？ わかるか？」

魔王が蓮に聞く。

「分かってたら、最初からあんなこと言わない」

明らかに不機嫌そうに蓮が言う。

「まあ、そう怒るな。王、いや王族は昔から魔族を毛嫌いしている。魔族は国民ではないから、税も徴収できない。しかも言うことを聞かない。完全な独裁政治、まあ、いわゆる世界征服だな。を目指している王族にとって魔族は邪魔なだけだからな」

「でもなんでウソをつくことになる？」

「そりゃ、自分の軍じゃ魔王を倒せないからだろ。普通の人間じゃまず、魔族にかなわないしな。だから、毎年勇者を送る。光と闇の両方をな。勇者は高スペックだから魔族にも勝てる」

蓮は魔王に質問をする。

「毎年ってことは魔王が、今までの勇者に勝ち続けてるの？」

「いや、そうじゃない。勇者に勝ったり負けたりしている。負けた場合は後任の魔王が勇者を倒す。ちなみに去年の魔王は勇者に負けてる」

「今みたいに説得すればいいんじゃないの？」

「説得したのは俺が始めてだ。俺は戦いが嫌いだからな」

【嘘つき。本当はめんどくさいだけのくせに】

ラルが呟くがスルーされる。

「まっ、そういうことだ。他に質問は？」

「この卓袱台はどこで手に入れたの？」

蓮の祖父は卓袱台を売っている（時代遅れだなと蓮は思っている）。その卓袱台になんとなく似ていたから聞いた。

「いきなり話がそれだな。まあいい、実は俺は日本の1600年前

に行ったことがあるんだ」

魔王が胸を張って言う。

【仕事から逃げるためにね。大変だったんですよ、魔界中大騒ぎだったんですから】

ラルがあきらめたような口調で言った。

「うるさい！ まあ、その時に白手 勝^{まさる}という人にもらった。あれ、白手？ お前の先祖か？」

1600年前に卓袱台があるかどうかは置いておく。だが、勝は明らかに蓮の祖父の名前だ。あの人は本当に人間なんだろうか……。そんな考えが蓮の頭の中に浮かぶ。

「まあいい。とにかくどれくらい強いか見たいから、戦ってみるぞ。いいな？」

蓮は頷いた。

「じゃ、ラル準備してくれ」

このあと、蓮が驚くことになるのはまだ誰も知らない。

まおうさまの現状説明（後書き）

昨日に続き長くなってしまいました。それにしても、蓮のお爺ちゃんって何者なんでしょう……。自分で書いておいて、疑問を感じます。

勇者様の憂鬱（前書き）

誤字脱字あったら教えてください。

勇者様の憂鬱

「で、これからどうする？」

あの後また二人は卓袱台に向かい合って話を始めた。

「俺としては光の勇者が来た時点で王を倒しに行きたいからここに残ってほしいんだけど」

蓮は少し考えてから言った。

「そうする。特に行くところもないし」

「よし、それじゃあ城を案内しないとな。おい、リリイ！」

「なんでしょーか、魔王様？」

また同じような声を出すリリイ。

「こいつにこの城の中を案内してくれ」

「？ この人は誰ですか？」

「ああ、そうか。まだ二人とも会ったこと無いんだっけ。こっちは白手 蓮。闇の勇者だ」

「おおー。それは凄いですねえー」

魔族だったら警戒するところに感心するリリイ。

「蓮、こっちはメイド？ ラル、こいつはメイドだと言えるのか？」

【それは難しいですね。お茶を出す以外メイドとしての仕事をしない人をメイドと呼んで良いのか……】

「まあ、とにかくリリイだ」

「ラルも魔王様もひどい！」

そう言っただけ泣くふりをするリリイ。

「ま、後よろしく！」

そう言っただけ魔王は早々と去っていった。

「とりあえず行きますか！」

ふりをやめたリリイ。とことこと歩き出すが10歩進まないうちに転ぶ。

「はあー」

大きなため息をつく蓮だった。

勇者様の憂鬱（後書き）

更新遅れてすみません。色々あつて出せませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8997z/>

設定上のまおうさま！？

2012年1月4日16時45分発行